

総合討論



【司会(宮脇)】最初に山田先生への質問です。19世紀ドイツ語圏の人類学(アントロポロジー)へのグスタフ・クレムの影響は、シュミットにもあったのかに関してです。19世紀ドイツのNaturvolk観の影響および名残はどこにあったのかということが、ひとつめの質問です。

もうひとつ、山田先生への質問を読み上げます。「ドイツ語圏に含めるのは問題かもしれませんが、オランダ構造主義学派の影響の有無がドイツ語圏全体でどう受容されていたのか、ご存じであれば教えてください。また、ドイツ人類学における個別性と普遍性の関心のあり方など、お考えがあればお話しください」とのことです。

では、まず山田先生から、この2点についてお答えいただけますでしょうか。

【山田】 ご質問ありがとうございます。どちらもかなり専門的なトピックで、私も詳しく知っているわけではないので恥ずかしいのですが、ひとつめのご質問は、19世紀ドイツのアントロポロジーにおけるグスタフ・クレムの影響ですね。グスタフ・クレムは、19世紀の半ばに、いち早く世界中の諸民族の資料をまとめて、その後の民族学的な研究の基礎をつくった人で、ある意味、バステリアーンやヴァイツと似たような仕事をしたと言っていると思います。ですから、その影響というのは、直接シュミットがそれを継承しているということはないかもしれませんが、間接的には、そういった大きな流れの上に立ってシュミットも仕事をしていたということは言えると思います。

それから、「Naturvolk」という、19世紀に出てきた「自然民族」という考え方ですよね。「Kulturvolk(文化民族)」と分けるものは文字の有無というように大まかに考えてよいかもしれませんが、無文字の、自然に近い生活をしている人々と、より文化的な、文字をもった生活をしている人々との違いは、19世紀の初めぐらい、あるいは18世紀の終わりぐらいに、ヘルダーあたりが言い出しました。それはドイツの、広い意味での人類学研究の基礎になっていますので、やはりその流れの上でシュミットも研究していたということです。直接の影響関係までは言及できませんが、そうい



山田仁史氏

うことは言えると思います。

2番目のご質問は、オランダの構造主義のドイツにおける受容なのですが、このことについて私は全く分かりません。すみません。少なくとも、レヴィ=ストロースたちの構造主義よりももっと早く、それとは違う流れでライデン学派が存在したということが、彼らの仕事の英訳などによって広く知られるようになってきました。ドイツ語圏にも影響はあったのかもしれませんが、それはちょっと分かりません。

それから、個別性、普遍性というのは、何を意図されてのご質問なのか、やや分からなかったもので、これからの残りの時間で似たような議論が出てくるかもしれませんが、それに残したいと思います。まずは、そんなところです。

*

【司会(宮脇)】 ありがとうございます。山田先生への質問はまだもう少しあるのですが、先にクネヒト先生への質問を紹介させていただこうと思います。

まず、ひとつめは、『An Anthropology without mission』に意味はあるのでしょうか。我々もミッションをもってアンソロポロジーをしているのではないのでしょうか。そういう意味では、ミッションナリーと変わらないのかもしれませんが。

ふたつめは、「戦後、南山大学の設立計画が具体化した時、岡正雄と石田英一郎を専任教員にしてほしいと嘆願が来たということですが、このことに関して何か資料が残っているのでしょうか」ということと、「北京にあった輔仁(Fu Jen)大学について、モンゴル史のワルター・ハイシッヒについてご存じのことはありますか」ということです。クネヒト先生、いかがでしょうか。

【クネヒト】 最初の質問ですが、『An Anthropology without mission』に意味はあるのでしょうか、というのは面白い質問だと思いますが、関心をひく問題は「mission」という概念の意味でしょう。

もしキリスト教の教えを宣伝する「宣教活動」という意味のミッションであれば、これには、はっきりした意図があるわけです。つまり、イエスの命令による派遣に従って、特定のメッセージ、つまり救いのメッセージを相手に伝える努めです。世俗的に言うなら、宗教的な教えを伝える「使命」です。

他方では、アンソロポロジーのmissionには、これに似ている面があります。どういうことかという、アンソロポロジーはヨーロッパの植民地観と深い関係がある学問だと考えています。つまり、ヨーロッパの諸国家が海外で植民地を獲得するにつれて、本国の大学で植民地の住民のあり方が議論されるようになりました。山田先生が言われたように、海外に文字や歴史のない人間がいるのではないかとか、それはどのようなタイプの人なのかなどについての好奇

心が沸いてきたのです。しかも、肌の色や丈の違いなどを、正確に調べて、測ることによって、科学にめいた何かの学問が生まれてくるだろうというような考え方なのです。アンソロポロジーというのは、もともとはそういう意味の学問で、一種の「人間論」なので、「文化人類学」ではありません。むしろ、初期のアンソロポロジーとは、医学の部門の概念として生まれてきたと思います。

では、そのアンソロポロジーのミッションはどこにあるかという、結局、ヨーロッパの人たちに対して、それ以外の、つまり文化のない人たちの異質性を紹介するようなものです。決して誇るべきことではないと思います。

植民地での生活様式のあり方をヨーロッパ本国の人たちに見せるために、「世界博覧会」、つまり、「World Exhibition」という企画がありました。そのために、例えば、アフリカなどの植民地とか、アメリカ大陸などから原住民たちがわざわざ連れてこられて、人間がまるでモノと同様に展示される営みでした。彼らの生活と文化を本当に理解するためではなくて、「面白い、面白い」「あの連中を見てください、見てください」ということだったのではないかと思います。

やがて、アンソロポロジーとは、ある社会の「生活様式」全体を研究する「民族学」のような学問になって、植民地の人たちにも独特の文化があり、歴史もあるが、ただ、彼らには文字がないので自らの歴史などを私たちのように文字で以って表現し、記録できる手段はありません。

このように学者たちが次第に見解を変えて、それに従って異文化の実態を把握し、あるいは、見ることができるようになったわけです。アンソロポロジーには、このような変化が起ってきたことに、シュミットが唱えた歴史的民族学の弟子たちは、決して無関係ではなかったと思います。以上は、今ここで申し上げられる位のことです。

2番目の質問は、これに詳しく答えるのは、私にとってちょっと難しいです。事実だけ述べると、岡先生と石田先生は、2人とも南山大学に来たことは確かです。

ひとつは、『南山大学五十年史 写真集』の中に、人類学研究所の創立を祝う時の来客の記



クネヒト・ペトロ氏

念写真が載っています。その写真には、神言会の人も含めてたくさんの方々が写っていますが、一番下の列の右のほうに立っているのは岡正男先生です(南山大学50年史作成小委員会編 1999: 48)。

当時は、1949年の秋でした。まだ日本は今のようには豊かな国ではありませんでした。しかも、人類学を専門職にする人はまだ少ないし、しかも、彼らが就職できる大学などの施設も稀な時代でした。そこに、南山大学にはこのような施設ができたので、専門家を引き付けるような反応があったようです。そのような話を聞きました。

ただし、岡先生がそのときには既に当時の都立大学に勤めていたかどうか、確かめたことがないので、詳細が分かりません。しかし、彼には、その祝いに出席する特別な理由があったでしょう。なぜなら、彼はかつてウィーン大学でシュミットに教わったこともあれば、1935年来日したシュミットのために通訳と旅行案内を務めたからです。

それから、個人的なことなのですが、私が南山大学に来たのは1977年あたりです。その頃に岡先生が一度沼澤先生を訪ねてきました。沼澤先生は当時私と同じ家に住んでいたのですが、岡先生と一緒に会いましょうと声を掛けて下さいました。それで、私は南山大学で、既に高齢者であった岡先生に会ったわけですが、彼が南山大学で教えたかどうか、残念ながら私は知りません。

石田先生の方は、南山大学でしばらくの間、東京から通いながら人類学を教えたということだけを聞いていますが、それ以上の詳しいことが分かりません。

*

【司会(宮脇)】 続きまして、再び山田先生への質問をふたつ紹介します。

南山大学の卒業生という方からの質問です。「シュミットのオーストリック語族を在学中に学びました。太平洋圏全域を包括するような大言語圏の学説について、現在はどうのような評価が与えられていますか」とのことです。そして、これはコメントかもしれませんが、「学術評価は別として、ロマン溢れる学習体験でした」とのことです。

もうひとつは、「ウィーン学派、ドイツ語圏の学問ではフロイトが巨峰ですが、シュミットの人類学とフロイト学派との関係はどう理解したらよろしいでしょうか」とのことです。このふたつについて、お願いいたします。

【山田】 ありがとうございます。後半の質問のほうが、あまり知らないということもあってお答えしやすいのですが、フロイトはシュミットとは犬猿の仲というか、シュミットはフロイトのことは大嫌いだと思います。ギングリッチさんからの孫引きみたいになりますが、シュミットがフロイトをウィーンから追い出したということが書かれていました。本当かどうか詳

しいことは分かりませんが、確かにシュミットの著作を読んでいますと、私が今日は自重気味に言った「プスュヒョロギジーレン」という心理学的な解釈や、そういう心理学の問題にすることをすごく嫌っている感じがします。

心のもちようは非常にシュミットの関心事ではあったのですが、彼にとっては、それを体系化し、ある文化圏の中に位置付けていくことのほうが重要で、内面の問題として取り扱うフロイトの姿勢とは正反対とまでは言いませんが、かなり違うものだっただろうと思います。

ひとつめの質問ですが、背景を言いますと、シュミットは「オーストリック語族」という仮説を立てました。これは2つの語族を組み合わせたというか、さらに上位の語族として考えたものです。ひとつは、オーストロネシア語族という、東南アジアの島嶼部からオセアニアに広がる語族です。もうひとつは、オーストロアジア語族という、東南アジアの大陸部に広く分散している語族です。このふたつが、過去の非常に古い時点では同一の祖先をもっていたのではないかとシュミットは考えて、それをオーストリック語族、アウストリッシュ(Austrisch)と名付けたわけです。20世紀のかなり早い時点での論文でそういうことを出しました。

私はあまり専門ではないのですが、言語学の分野でも、オーストリックを再評価する人たちがいると聞いていますし、アメリカの言語学者のグリーンバーグの弟子のメリット・ルーレンさんなんかは、そういうことを再評価しています。

それから、最近になっていろいろ面白いと思っているのは、ノストラティックという大語族です。ユーラシア大陸のいろいろな語族をひとまとまりにして、ものすごく古い時代には、共通の祖語があったのではないかとというノストラティックという仮説もありますが、知らない間に大辞典が出ていました。2010年代に3巻本だったか4巻本だったか、個人でやられたようなのですが、大きな語源辞典が出て、無料でダウンロードできるためダウンロードしましたが、まだ中身はきちんと見ていません。

非常に夢のある話で、古くさかのぼると、人類の言語がかつて、今まで考えられていた小さな無数の語族よりもさらに高いレベルで結び付いていたのではないかとという仮説については非常に面白いと、個人的には思っております。

*

【司会(宮脇)】 ありがとうございます。では、さらにふたつ紹介させていただきます。

ひとつめは、クネヒト先生だけでなく山田先生に対しても書かれているのですが、質問ではなくコメントを求めるとのことです。「植民地主義と人類学、布教と人類学の関係のあり方については、異文化理解における視座が自文化中心主義に陥らないことが重要なのではないのでしょうか。自文化中心主義、自文化優越主義、エスノセントリズムに陥らないことが重要なので

はないでしょうか」。

ふたつめは、クネヒト先生への質問です。「言語学のレンメルヒルト、民族学のアウフェンアンガー両先生の授業を受けたことがあります。これらの先生とクネヒト先生の関係や、両先生への評価があればお聞かせください」。

【クネヒト】 まず、レンメルヒルト(Anton Lämmerhirt)とアウフェンアンガー(Heinrich Aufenanger)の話ですが、私はレンメルヒルト先生に初めてスイスで会いました。当時、彼は私が教え始めたばかりの神言会経営の高等学校を訪れました。私が日本へ行きたい希望を打ち明けたら、彼は「馬鹿な考えだ」とか「日本へは行かないほうがいい」と言いました。

私には、彼の反応が攻撃的と感じ、なおかつ、彼に不愉快な印象を与えてしまいました。この反応の根拠となる理由はわかりませんが、彼は南山大学で言語学を教えていて、研究所の所長も務めた経験者でもある上、私と同じ神言会の会員でした。こうしたことで、彼の返事は謎めいたものでした。そのぐらいのことしか知りません。彼の研究については、わずかにだけ読んだので、詳しいことをほとんど知りません。自分が来日してからまず東京で暮らしていました。レンメルヒルトは南山大学を定年退職して、代わりに神学院で神学生の指導を手伝ったようです。スイスでのエピソードもあったので、付き合いを避けて、あまり交流はありませんでした。

アウフェンアンガー先生のほうは、もともとは学者ではなく、ニューギニアのミSSIONナリーでした。宣教地の人々の言語と文化に通じて、やがて専門研究をして、ウィーン大学で割と早くドクターを取ってから南山大学へ来ました。そして、1964年に南山大学の人類学科がニューギニアへ派遣した調査団の一員としてアウフェンアンガー先生も同行しました。彼は現地の事情に詳しく、住民との交流の経験もあったので、調査団にとって貴重な支援者でした。彼は調査地の住民と宣教師をよく知っていたと言ってもいいぐらいの方で、調査団の方々には現地の適切な話者を紹介し、調査地を案内して、調査を様々なところで支える役割をもっていたと、私は団員からも、本人からも聞いています。私は敢えてアウフェンアンガー先生の人と仕事を評価するならば、彼は理論家ではないが、熱心で、慎重な民族史学者だと言えます。彼には、人の話に傾ける耳があり、文化の品物を丁寧にみる目があった。後者を語っているのは、彼が南山大学人類学博物館に贈った貴重な資料です。

さて、異文化の見方またはその理解の場合に、自文化中心主義に陥らないことが重要なことではないかという質問者のご指摘はいうまでもなく適切です。しかし、例えば、日本から見たところだと、ニューギニア諸民族の文化とは事実上「異文化」、つまり異質な文化です。事実に「異質」を指摘するには一応問題ないはずでしょう。けれども、相手の文化は我々のそれよりレベルの低いか高いものかという評価になると、それは、我々の文化を科学的根拠のない

勝手な基準にする価値判断に過ぎません。このように文化と文化を区別しようとするのがもう意味がないと思います。でも、どのように我々がこの世界の人たちと、できるだけ偏見なく接触でき、交流をもてるかということが、基本的な問題であると私は思います。

人間としては、全てのヒト(人)は性質の面で互いに共通しています。但し、ある人たちが、どのように物事を考えているか、どのようにモノを作っているか、どのようなモノを食べているか、というそれぞれの特徴によって民族の相異が生じます。でも、この相異は必ずしも「人」の生まれつきの特徴による相異ではなく、人が長い間生きてきた環境の諸条件による相異ではないかと思います。やや、バスティアン(Adolf Bastian)くさくなったかもしれませんが、もしかするとこのような視点は、私たち人類の将来を考えてみると、大変重要なことかも知れません。

それから、ワルター・ハイシッヒ(Walther Heissig)というウィーン生まれのモンゴル文化の専門家が、1941年にウィーン大学で博士号を取り、中国へ行って、北京でエーデル師に会うわけです。エーデル師が編集をし始めたばかりの雑誌『Folklore Studies』に早い時から調査報告などを発表しました。

私は数回、北京を訪ねた際に、そこでニマという名の先生に会う機会がありました。もう退職された方ですが、ハイシッヒ先生の研究に大変詳しいのです。ハイシッヒ先生の弟子ではないようだが、ハイシッヒ先生に非常に親しまれた方です。ハイシッヒ先生の著作を殆ど全て所有していました。この方は、若い時にやはりハイシッヒ先生がエーデル師と協力した輔仁(Fu Jen)大学に来て、ハイシッヒ先生に教わって研究したということ話を話して下さいました。私個人として述べさせていただければ、ハイシッヒ先生はモンゴル人の学者や知識人の間でよく知られて、モンゴルの人たちとその文化をよく理解していた方として尊敬されています。

以上の方々についてこのぐらいにさせていただきたいのです。最後に、ナチズムと人類学の問題に触れてみたいのです。この問題の核心には「人種(Rasse)」と「民族(Volk, ethnic group)」という概念があると思います。大ざっぱに分類してみると、確かに、人類学にはふたつの大きな分野があります。ひとつは、解剖学に近くて医学的な人類学、つまり形質人類学です。今ひとつは、人間とその生活環境を研究するいわゆる文化人類学の諸部門です。両方ともお互いに関わりがあります。しかし、以上で出した概念のうち、「人種」の方が主として形質人類学的概念であるのに対して、「民族」はむしろ文化人類学で盛んに使われています。ふたつの世界大戦間に発表されたシュミットの研究には、RasseとVolkについてのものがあります。これら研究で、彼はドイツのそれをとくに取り上げているので、これらの研究はナチのイデオロギーをバックアップしているように使われていました。彼はこの利用に強く抗議したので、これらの研究は結局、当時禁止された本のリストに載せられました (Schmidt 1932, 1935. 後者につ

いてBrandewie 1990: 238-242を参考されたい)。ナチ人類学の人種研究を乗っ取ったりして、自分たちが最高に優れた人種、北欧系のアーリア人の発生地を科学的に証明できると期待していました。こうした努力の「大黒柱」は「先祖の遺伝(Ahnenerbe)」の調査によって、古代インドから移住して来たと言われたアーリア人の現地を探ろうとしました。アーリア人の純粋な末裔グループが、チベットの奥地に残存している伝承を辿ろうとして、ナチ党が党員学者の調査団を1938/1939年にチベットへ派遣しました(Schäfer 1943)。

しかし、人類学者の中でも、ナチのイデオロギーに賛同した人たちもいました。そうしなくても、ナチのイデオロギーを支援しているような内容の著書なら、ナチに使われたこともあります。シュミットはそのような扱いを厳しく批判したことがありますが、人種などに関する自らの発言には曖昧なものもあったので、それを誤解して、悪用する可能性がありました(Brandewie 1990: 242)。このような歴史を考えると、我々の学問には案外、何かのイデオロギーに弱く利用され得るような面があるのではないかと私は思います。

*

【司会(宮脇)】 ありがとうございます。これまでのやりとりの中で、後藤先生、伊藤先生からもし何かコメントや補足などがありましたら、お願いできるでしょうか。

【後藤】 単純な質問で、山田先生あたりに聞きたいのですが、アントロポロジーというのは、古くは哲学者のカントが言いましたよね。確かその本も岩波新書で翻訳されています。ただ、カントが言ったアントロポロジーというのは、イギリス人とドイツ人とフランス人の国民性を比較して、それを中国人はフランス人に近い、日本人はイギリス人に近い、韓国人はドイツ人に近いというような、国民性の議論だったのですが、カントが使ったアントロポロジーというのは、その後、ドイツのシュミットや、我々が今使うような意味でのエトノロジーやアンソロポロジーに受け継がれていったのでしょうか。それとも、全くそれとは関係ない学問になったのでしょうか。

【山田】 私は哲学について弱いですが、ただ、アントロポロジーというのは、ドイツ語で言うとうと3つぐらいに分けられます。もともとは体質人類学的な人類学と、カントの言う人間学みたいな意味での、哲学的な人間学ですよ。それに加えて、今日お話したような社会文化的な人類学という言い方は、最近ちょっと英語圏の影響を受けてつくってきたところがあります。ただ、その源流は19世紀にもあったのではないかというお話をしました。

ですから、その辺はちょっと、概念の捉え方がドイツ語の場合はややこしいのではないかと思います。それぐらいしかお答えできません。

【後藤】 もう一つ、先ほどのご質問の、オーストリックの話で思い付いたのですが、私の話

でも最後のほうにちょっと言いましたが、最近また「ビッグデータ」といっていて、いろいろな、遺伝学や考古学、物質文化、民族学、そして神話学などのデータをコンピューターに入れて、その間の相関関係を調べてみると、予想も付かなかったような相関関係、ある地域とある地域が結び付いてくという結果が出てきました。

神話だけを見ると、例えばアフリカ南部のカラハリのサンやコイサン、いわゆるサハラ南部と、ネグリト族とアボリジニ、さらにグジンデがやったフエゴ島、南米の南部のほうに、実は世界に飛び飛びに共通性が現れてきて、一体これ

は何なのだろうという議論が出てきています。かつてシュミット、あるいは、おそらくブルーギーらが言ったいわゆる原始民族とされた集団に共通したものがあるのではないかという議論が出てきています。

それは最近、神話では世界神話学(World Mythology)というのがあって、私も紹介したことがあります、実は昔あって、一時否定された発想に近いですね。つまり地域を越えた、大風呂敷の議論は良くないということで、人類学でもどんどん研究の細分化が進んできたわけです。しかし最近になってコンピューターという新しい手段で、一人の個人が処理できないような大量のデータの間の相関をとにかく解析してみると予想もしなかった結果が出てくることもあると言われてしています。

しかしそれでも結果を解釈するのは、最終的にはやはり人類学者、神話学者なのです。このようなマクロの研究を再評価すると先ほど言ったオーストリックのような仮説の再検討というもの、ひょっとしてあり得るかもしれません。ノストラティック言語(ノストラ祖語)もそうですが、そういうもので人類史を語れるような新しい議論が出てくる可能性があります。望むらくは人類学研究所もそれに関わるような活動をしていければいいかなと思っています。夢といいますか、感想です。



後藤 明氏

*

【伊藤】 私個人としては、南山大学における人類学の研究や教育が、今後どのような展望の下に新しい魅力あるものに発展していくのだろうかということを期待しながら、とくに今ちょっと話題に出ましたが、民俗学、民俗文化、民俗社会というものと、欧米伝来のアンソロポロジーと言われるような研究展望との関係について、大学としてどのようにお考えなのかなということを前々から思っております。

南山大学は、やはりミッションの背景の下に成り立っている大学でありながら、実はこのグローバルな現代の世界の中でも、日本自体の文化的な基盤というのか、根深い、我々もなかなか自覚を迫られながらも難しい土着の文化・伝統というものをどのようにお考えなのだろうと。これはなかなか大きなテーマで、今日のシンポジウム自体のテーマではないのですが、今マイクを回された手前、外部の者としてこういうことを聞くべきかなと、今、あえて主任の後藤さんに伺いたいと思います。

要するに、南山大学の学問全体の展望の中で、人類学系の学問の中で、文化社会を対象とするような学問の中で、日本民俗学をどのように位置付けるのか。ワールドワイドないろいろなアンソロポロジーの展開はいろいろあっても、何でもかんでもできるわけではないので、やはり日本における、あるいは南山大学における人類学として、日本の土着の文化・伝統というものに対してどのようにお考えなのかなということを、今日のシンポジウムの本題とは無関係なのですが、こういう機会に、あえて聞いてみたいと思いました。

【後藤】 私の話の中でも出ましたが、民俗学の5大学研究所連合というのに加わりました。南山大学にはたくさん人材がいるのですが、フォークロア系の方は、当時、濱田先生という方がいらっしゃったのですが、あまりたくさんはおられなくて、そういう部分を補うために、積極的にフォークロア系の大学、研究者と交流を図りたいということを試みたわけです。

それから、フォークロアではないので



伊藤 亜人氏



すが、「アジア人類学者ネットワーク」というものを国際化推進事業で進めた理由の一つが、私もそうですし、フィリピンの先生もインドネシアの先生もインドの先生も、何らかの形で欧米の教育の影響を何度か受けて、帰国されて、そして、自分たちの国の中で、それぞれ人類学を土着化しています。

例えば私はフィリピンの海のほうで調査をやっていた時期がありました。そのときフィリピンの研究者から学んだのはマリンロアやウォーターロアという概念です。マリンロアというのは、海に関する伝統的な知識という意味で、どうやって魚を取るか、どの季節に魚を取るかという、いわゆるプラクティカルな知識の基本ですが、例えば、海に関するいろいろな、言い伝えや「海坊主」「海幽霊」みたいなタブー、またこういうことをするとさらわれるなど、そういう超自然も含めた知識というか知恵なのです。

これはすごく勉強になりました。日本人の生態人類学というのは、どちらかというプラクティカルな議論だけをしており、一方で伝説や神話や民話は、民俗学者がやるというように役割分担がなされています。ところがフィリピンの研究者たちは、それらをすべて一つの「ロア」という概念で捉えています。しかも、そういうものの社会における意味付け、例えば道徳や、してはいけないことを教えるという意味もあり、このような考え方は私はすごく勉強になりました。こ

これはフィリピンの人たちの、在地の民俗学みたいな知識であるわけです。それにすごく感銘を受けました。

それで、そういうものがインドネシアにもインドにもあるだろうと。そういうものを、取りあえずアジアの中で情報交換したらどうだろうと。さらに実際の背景には災害があり、人々は災害にどのように対応しようとしているのか、そういう在地の知恵についての情報交換をしようと言うことで、国際化推進事業をやってみたら面白いだろうということです。

それから、アジア人類学者ネットワークというのは、実は日本だけではないのですが、欧米で教育も受けている方が帰ってきて、もともとあった考え方とどう融合させて、いわゆるindigenous、つまり在地の人類学を、独自の人類学をつくり上げようとしているのかという情報をお互いに交換しようというものです。日本は日本で、やはり日本のフォークロアの議論なんかも視野に入れつつですね。ですから、国際化推進事業の国内のシンポジウムでは、いわゆるフォークロア系の人も実際に呼んで、「災害」というコンテキストではありますが、議論しています。

そういう形で、もともと人類学は欧米から輸入した学問ですが、それをできるだけ在地というか、日本独自のものにしていく努力は、研究所でやってきたつもりです。ただ、それはアジアという枠組みです。ですので、もちろん広いアジアが一枚岩だと言っているわけでは全然ないのですが、近隣の国の人たちとそういう交流を図るような場に人類学研究所がなっていけばいいのかなと思っています。

人類研の仕事を引き受けたときに、例えばモデルになるのは、もちろん国立民族学博物館や東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所などがありますが、そんなに規模は大きくないので、あまり大きなことを考えると良くないので、もうちょっとターゲットを絞った形で活動しようと考えました。しかし、やはり人類学は国際的な視野は捨てられないし、しかし日本の、あるいはアジアの、いわゆる在地の知恵みたいなものも生かしつつ、問題点をはっきりさせるような、そういう研究所にしたいと考えていました。そのために、いわゆるアジア人類学者ネットワークというものを始めてみたのです。あまりお答えになっていないかもしれません。

【司会(宮脇)】 ありがとうございます。

では、これで総合討論を終えさせていただきたいと思います。先生方、ありがとうございます。

参考文献

Schäfer, Ernst

1943 *Geheimnis Tibet. Bericht der deutschen Tibet-Expedition Ernst Schäfer*. München. F. Bruckmann.

Brandewie, Ernest

1990 *When Giants Walked the Earth: The Life and Times of Wilhelm Schmidt, SVD*. (Studia Instituti Anthropos, v. 44), Fribourg, Switzerland: University Press.

南山大学50年史作成小委員会(編)

1999 『南山大学五十年史 写真集』南山大学。

Schmidt, Wilhelm

1932 *Die Stellung der Religion zu Rasse und Volk*. Augsburg. Haas & Grabherr.